

2022. 8. 5発行 ニュースレター第300号

〒262-0019 千葉県花見川区朝日ヶ丘 5-24-2

TEL. 090-7941-7655 FAX: 043-483-0027 代表: 小西 由希子

E-mail: yatsudasukisuki@gmail.com, Home Page: <http://www.ceic.info/>

「未来のためのフィールドミュージアム」

NPO法人 自然観察大学学長 市川市 唐沢 孝一

個人的なことで恐縮だが、私が育った群馬の実家は江戸時代からの農家であった。小学校4～5年頃まで住んでいた家には囲炉裏や馬小屋があり、初夏には藁葺きの屋根にアヤメが開花した。水は井戸水、ご飯は薪で炊き、縄を編み草履もつくった。「裏庭には二羽ニワトリがいる」の早口言葉のごとく鶏を、そしてウサギ、ヤギ、羊も飼育し、動物たちの世話は子どもたちの日課であった。山羊の乳絞り(搾乳)は得意技の一つである。



ニホンアカガエルの卵塊調査をする唐沢さん
第5回「アカガエルの産卵を見に行こう会(2007年2月2日)」

子どもや孫に、江戸時代の生活さながらの幼少期の生活体験を話しても理解してもらえない。ちょっと前まで、といっても60年～70年前には、水道もガスもない、テレビや電話もない生活があたりまえであった。その時代に山村で生まれ育った人と、今の山村や都会育ちの子どもや孫の世代とでは、同じ山村を見ても別風景を見ていることが多い。前者は田舎暮らし「ソノモノ」であり、後者は田舎暮らし「モドキ」である。「モドキ」は「ソノモノ」ではない。別荘で暮らす都会人のように生活基盤は都会にあり、田舎暮らしは一種のロマンと化したモドキである。ここまで書いてみて、一つの発見があった。来年80歳を迎える筆者は、「ソノモノ」と「モドキ」の両方を体験した数少ない世代であり、今や絶滅危惧ⅠA類に近い存在なのだ・・・、と。

2007年1月30日、凍てつく厳冬期の深夜に初めて下大和田を訪ねた。その時、二つのことが頭をよぎった。一つは、果たしてここは「モドキ」なのか



ニホンアカガエルと卵塊(2007年1月30日)

撮影: 唐沢孝一さん

「ソノモノ」なのか。米を売って生計をたてているとも思えない。では「モドキか」と思いきや、伝統的な「米作り」に拘り、無農薬、手植え、冬水田んぼ、古代米に挑戦し汗を流している。「農業にして農業ではない」、「モドキに似てモドキではない」のである。

そしてもう一つ。冷たい月光に照らされて、ニホンアカガエルの産卵が始まった。あの神秘的な体験は生涯の宝物の一つとして今も心の奥深くに刻まれている。2月の観察会ではヨシ原でウソやエナガ、ノスリなどを観察。6月のクモの観察会では樹陰に座り川名興先生による「ハエトリグモのフンチ」



観察会で解説をする唐沢さん(左)
第85回下大和田観察会(2007年2月4日)

(昆虫相撲)の話しに耳を傾けた。さらに、月々配信されてくるニュースレターでは、子どもや地域の人々が参加し、田起こし、田植え、草取り、案山子づくり、稲刈り、脱穀、餅つきや収穫祭などに生き生きと取り組んでいる。ニュースレターは今号で300号に及んだ。こうした取組が「モドキ」であろうはずがない。



第85回下大和田観察会(2007年2月4日)

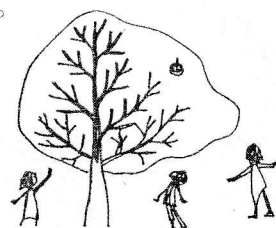
筆者の直感であるが、このグループの活動を一言で言えば、「ソノモノ」と「モドキ」をつなぐ橋渡しにあるのではないだろうか。東洋の風土に生まれた稲作とその文化を継承し、次世代に伝えるためのフィールドでの実技を伴う活動である。

ちば環境情報センターから毎年送っていただいているカレンダー。2022年の表紙写真は「早春の下大和田をドローンが捉えた景観」である。用水が流れ、畦道が続く。草原や林が隣接し、日本在来の生物種の生息地が広がっている。伝統的水田稲作を通してそこに暮らすあらゆる生命が一つの生態系を構成している。これこそが「生物多様性の保全」であり、「生きたフィールドミュージアム」そのものである。数千年にわたって培われてきた稲作文化の「知の体系」を次世代へ伝える、そのための実験が下大和田で行われているように思えるのだが、どうであろうか。遠い未来の、都会生まれの「モドキ」たちに必ずや感謝される日が来ることを夢見たいものである。

(写真提供: 田中正彦)

お米にまつわるミャンマーの話

～第3回：一言では語れないミャンマー式のあいさつ～



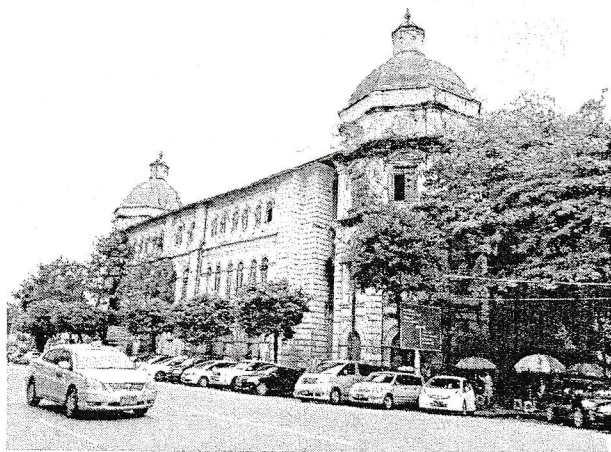
言語というのは、その国々の人々の文化や価値観を表す鏡であり、その人たちが住む世界そのものだと思います。言語によって、その文化にしかない概念(あるいは概念の欠如)を見つけては、日本語との共通点や違いを認識したりするのはとても興味深いです。例えば、日本語の「ご飯」という言葉には、「炊いたお米」と「食事全般」の2つの意味があります。ミャンマー語で炊いたお米のことを「タミン」というのですが、タミンは日本語のご飯と全く同じで、食事の意味する言葉でもあります。「米＝食事」という考えは、米を主食とする文化の特徴なのかもしれませんね。

ところで、ミャンマー語でもう一つ面白いと思ったことが、ミャンマー語には「こんにちは」に相応する言葉がないことです。たまに「こんにちは」を「ミンガラバー」と訳されているのを見ることがありますが、これはかなりフォーマルな言い回しで、お店の人がお客に向かっていう「いらっしゃいませ」といった場面で使われるもので、知り合い同士で使うことはまずありません。その代わりに知り合いと出会った際、ミャンマー人は何というかと言うと、「タミン・サー・ピービー・ラー？」と言います。直訳すると「ご飯はもう食べた？」と言う疑問文です。返答には特に定型文があるわけではなく、訊かれた方は、「まだ食べてないよ。」とか、「もう食べたよ。」と返し、さらに相手から「じゃあ、何

千葉市若葉区 岩沢 久美子

食べたの?」「なんで、まだ食べてないの?」と言う風に、ご飯を巡ってしばらく会話が続けるのです。

初めの頃は、ミャンマー人がなぜそんなまだるっこしい挨拶をするのかがとても不思議でした。けれども、しばらくこの国に暮らしてみて、なんとなく理由がわかったような気がしています。ミャンマー人は、人と人とのつながりをとても大事にする文化です。人生において出会った師や先輩方を慕い、彼らから学び、また時に助けを借りながら自らの人生を切り開いていきます。また、日々の生活において



ダウンタウンの街並み

ヤンゴン市南端のダウンタウン(市街地)には、イギリス植民地時代に建てられた建物が多く残っており、今も庁舎として使われている。